

先輩からの手紙 タイトル「夢は大きく、志は高く、人生は遅しく」

株式会社 三菱東京UFJ銀行（現在 株式会社モビットへ出向中）

前田 憲一（高37期） [東京大学文学部社会学科卒]

－1983年6月上旬の放課後、立高2Hの教室にて。

「演コンのキャストの役を俺に出来ないか。」「・・・分かった。」

私の世界観、人生観の土台は立川高校の3年間で培われました。心が折れそうになった時、いつも背中を押してくれるのは、苦勞は必ず実を結ぶという信念です。

## 1. 「銀行」のビジネス

大学時代の4年間は、体育会の弓術部で練習に励む一方で、1980年代の日本社会をミクロとマクロの両面から論考しようと、京大出身の教授のゼミに入り浸っていました。大学4年の春、地球儀を眺めるように大局的な視点で物事を捉えたうえで、ダイナミックな仕事を手がけたいとの動機が生まれ、尊敬していた弓術部の先輩の誘いもあって、三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)に決めました。

人や情報が動くと必ずマネー(資金)も動きます。資金の流れを柱に据えて、社会をデザインするのが銀行の仕事です。銀行といえば、支店の窓口や住宅ローンぐらいしか印象がないと思いますが、それらはごく一部分で、企業や国家の財務活動(調達と運用)サポートのみならず、企業の海外進出支援やリスクの仲介など銀行の仕事のフィールドは広がっています。世の中の仕組みを掴むには、ふさわしい仕事です。

私も最初の1年は支店で中小企業向けの融資を担当しましたが、その後は銀行内の大規模システム開発プロジェクトで北米、欧州、香港への出張、銀行のビジネスフロー改革、新ビジネスの設計とマーケティング、電子マネー実験、銀行設立ビジネスへの参画などさまざまな体験と実績を積みました。その後、証券会社でマーケット(市場)の企画を担当し、現在は消費者金融会社で広報・広告宣伝を担当しています。

とにかく仕事が面白い。若い頃は徹夜もよくしました。目の前のことに必死でぶつかり、すべきことを見極め、選び取り、ひたすら力を注ぐ。「できたらいいな」というレベルのあいまいな考え方では、おそらく何も実現しません。「必ずやるのだ」と意思決定して、その実現のため、24時間考え、行動する。その繰り返しです。

そして仕事の本質は、チーム・組織のパフォーマンス曲線の最大化を図ること。そのためには、いくつかの変数がありますが、個人の能力を高めるだけでは不十分。チーム全員にビジョンを伝え、共有し、ゴールに至るまで絶えずモチベーションを注入し続けるけるリーダーになることです。適切なシナリオと的確な配役、そしてそれらを演出し、ライブパフォーマンスの中でプロデュースし続ける。「この立場にいる人は、何をどう思っているのか。あの部門の人はどうか。若い奴はどう思っているのか。」そういったことを、あらゆる角度から想定し、洞察しな

なければならない。まずは最終ゴールに至るストーリーを描く。そして、あらゆる役回りの人間について、誰をどの場所のキャスティングに使えば効果的になるかということを懸命に考える。立高時代に行事やクラブ活動を通じて実感した体験と通じるものがあります。

## 2. 立高の3年間は人生の原点

非常に充実した3年間でした。立高生活は好奇心が尽きることがなく、3年間のうち休んだ日は、わずか4日間だけです。行事、クラブ・委員会活動、勉強を通じて、知力・体力・精神力の全てが著しく成長しました。とりわけ、神の啓示の如く、毎年大きなチャレンジが訪れ、それを乗り越えたことで、人間としての器が磨かれ、人生の礎になりました。

1年時は「苦手なものに挑戦する」。運動部に入部することでした。体を壊しかけ、途中で退部こそしましたが、体育に対する苦手意識はなくなり、スポーツの楽しさという新しい世界が開けると同時に、「何事も成せば成る。」という手応えを得ました。

2年時は「自分を表現する」。演劇コンクールで芝居をはじめて見た時、そのレベルの高さに圧倒されるとともに、“来年は出演したい”と思うほど感動したのです。2年生の6月、演コンチーフに“キャストの役をくれないか”とおずおず尋ねたところ、主演級の役を頂きました。稽古は厳しかったですが、結果は2位。全校生徒の視線が集中するなかで芝居をする心地よさ、立高祭でチームに貢献できたことの喜び。そして元来控えめな性格だった私自身が、自分を縛っていた枠を乗り越えたことが何よりも嬉しかった。この経験で一皮むけた実感があります。

3年時は「リーダーシップを発揮する」。3年有志の演コンをどうしても行いたくて、自らチーフに立候補しました。個性派揃いの面々を束ねて、舞台を創りだす難しさ。夏休みは受験勉強そっちのけで、脚本製作、キャスティング、芝居稽古、音響・照明・衣装等打ち合わせ。いろいろと悩みましたが、目指すべき地点が明確になると、自ずと1つにまとまっていくものです。総勢約80名の大所帯。やりきった達成感。リーダーシップの手応えをつかんだ気がします。

また高校入学後、数学と国語が得意科目になり、他の教科も含めて、自分でも驚くくらい集中して勉強に打ち込みました。勉強の意義や面白さを見出した3年間でもあったのです。

## 3. 『廻る三度の春秋を ともに睦しむわがつどひ』

さながら戦時中の軍事教練のような清明寮臨海教室。高校生のレベルを超越した合唱祭、演コン、応援団の技、キャンバス、文化祭のクラス展示。これらを平然とこなす立高生の優秀さには目を見張るばかりでしたが、誰一人として仲間を見捨てるような生徒はいませんでした。3年間は非常に短い。しかし、人生で最も密度が濃い時間だったと多くの卒業生が述べています。多くの仲間たちと、あなたの人生をとことん楽しんで下さい。本気で飛び込めば、立川高校は必ず応えてくれます。幾たびの歓喜を生み出し、深い絆と友情を育んできた立高の伝統をこよなく愛するとき、また新しい地平が見えてくることでしょう。